# 鄭孝胥と神戸、関西の文人たちとの文藝交流

柴田清継
蔣海波

## はじめに

清国駐神戸第八代理事（領事）鄭孝胥（字は蘇戡、または蘇堪、蘇龕、蘇盦、号は太夷、福建省閩県の人、一八六〇～一九三八年）は政治家としての評価はともかくとして、詩人、書家としての評価は極めて高かった。彼が残した日記と詩集は中国近代史、近代文学史の研究にとって、価値の高い史料である。(注1)

一八九一（明治二十四）年六月、鄭孝胥は清国公使館の書記官として、東京に赴任し、しばらくの間、読書と日本の文人たちとの応酬に時を費やした。東京での詩文交流においては、時に日本の漢詩人に対して厳しい評価を下したこともあったが、(注2)彼のこのような姿勢は、中国の伝統詩壇で最後の光彩を放つ「同光体」詩人の領袖としての、詩作に対する自信から来るものであった。

鄭孝胥が第八代神戸兼大阪正理事として神戸に赴任したのは、一八九三（明治二十六）年四月のことであった。翌九四年八月、日清甲午戦争の勃発によって、理事府が一時閉鎖され、理事らは帰国を余儀なくされた。そのため、鄭孝胥の神戸在任期間は一年四ヶ月と短かったが、彼の詳細な日記は、この間の神戸、大阪華僑社会の実態を克明に伝えており、華僑史の研究に関する貴重な記録となっている。(注3)

また、文人としての鄭孝胥は関西の文人たちとの交流も詳細に記録している。神戸理事府の歴代理事は文人としての素養を備えており、水越耕南をはじめ、地元の漢詩人たちと漢詩文を通じて交流を行うのが常であった。中でも、鄭孝胥の詩における実績と名声は群を抜いており、現在我々が進めている明治期の関西における日中文人の交流、とりわけ神戸理事府の理事たちと日本人との文藝交流に関する研究(注4)の中で、最も精彩を放つ一幕であると言ってよい。以下、その日記を主たる手掛かりとして、鄭孝胥と関西の文人たちとの文藝交流の跡を明らかにしたい。

## 一、関西の文人たちとの交流

### 1、関西の詩人たち

神戸に赴く前の一八九三年三月二十三日、東京に在任中の鄭孝胥

が、かねて親交のあった長尾雨山（名は甲、字は子生、雨山は号、通称は槇太郎、一八六四～一九四二年）[注5]と黒木欣堂（名は安雄、別号は著園、一八六六～一九三二年）に対して、関西の文人について尋ねたところ、雨山らは大阪の藤沢南岳（名は恒、字は君成、南岳は号、一八四二～一九二〇年）、五十川訊堂（名は淵、字は士深、通称は卓介・左武郎、訊堂は号、一八三五～一九〇二年）、西京の江馬天江（名は聖欽、字は永弼、天江は号、一八二五～一九〇一年）、小野湖山（名は長愿、字は舒公、湖山は号、一八一四～一九一〇年）と並べて、神戸の水越耕南（名は成章、字は裁之、耕南は号、一八四九～一九三三年）、亀山節宇（名は美和、又の名は雲平、字は由之、節宇は号、一八二二～一八九九年）を賞賛した（『日記』三四五頁）。

一八九三年四月六日、神戸に着任した鄭孝胥は、神戸の地方官吏、華僑社会のリーダーたちとの面会や、華僑の係争解決などに忙殺された。陳來幸氏の研究で明らかになっているように、例えば、就任した四月から五月にかけて、七件の係争を処理した。その中には、華僑同士の刑事、民事事件のみならず、日本人、日本の会社とかかわった事案、さらに大阪で起こった事案も含まれていた。[注6]

それらに一段落がついた後、鄭孝胥は七月十四日に水越耕南の訪問を受けている。兵庫県の通訳谷信敬（別名清泉）と裁判所の通訳鉅鹿赫太郎がそのときの随行者であった（『日記』三六一頁）。十九日に、耕南が詩一首を贈り、翌二十日、鄭孝胥が和詩二首を作った（『日記』三六二頁）。これに対して、耕南がさらに投詩（唱和を求める詩）一首を贈った。惜しいことに、この両者の唱和詩はまだ見つかっていない。耕南が常時投稿していた『神戸又新日報』に掲載された可能性が高いかと思われるが、同紙の明治二十六年七月の原紙が欠号のため、今の我々には調査のしようがない。

翌年の旧正月の七日、すなわち一八九四年二月十二日、鄭孝胥は同僚二人とともに京都へ旅に出た。賀茂川畔にあった浪花楼に宿を取り、翌十三日、高島屋で刺繍画を数点購入したほか、書肆で『会典』『烈女伝』『金石粋編』『潜研堂詩文集』『陸宣公翰苑集』などを購入した。午後、江馬天江・小野湖山両翁を訪ね、天江の髯と書、湖山の朴訥さが印象に残ったと記している（『日記』三九五頁）。

## 2、神戸の友人たち

三月二十四日に、谷信敬が関羽・張飛を描いた画への、鄭孝胥の題字を願い出た。その際の鄭孝胥の揮毫は左記の通りであった（『日記』四〇〇～四〇一頁、『詩集』三十五頁「日人求為題関張画像」）。

関張非猛士　関・張は猛士に非ざらんや
浩気興百世　浩気興ること百世
海外猶敬之　海外猶お之を敬す
豈不以好義　豈　義を好むを以てならざらんや
画師亦可人　画師も亦可人にして
胸無功名意　胸に功名の意無し
筆端小褒鄂　筆端　褒・鄂を小とす
於此知見地　此に於いて見地を知る

第七句の「褒鄂」とは、唐初、驍勇を以て鳴った段志玄と尉遅敬徳のことである。

三月二十七日、長尾雨山が牧野謙次郎とともに、鄭孝胥を訪ねた。

牧野謙次郎（一八六二～一九三七年）は、字は君益、号は藻洲、寧静斎、愛古田舎主人など。高松出身の漢学者で、早稲田大学教授、東洋文化学会理事、斯文会常議員、大東文化学院教務管理などを歴任した人物[注7]。雨山にとっては神戸理事府に数度足を運んだ上でやっとかなった面会だった。三人は手合亭で一席設け、歓談した（『日記』四〇二頁）。

五月十九日、神戸裁判所所長から大阪裁判所所長に昇任することになった馬屋原二郎への送別の詩（左記）を作り、楷書で清書して贈った（『日記』四一一頁、『詩集』四四九頁「馬屋原請余作詩贈其行諾之」）。公私ともに親交を結んだ記録である。

相見殊不遠　相見ゆること殊に遠からじ
于君誠有縁　君において誠に縁有ればなり
神交同故旧　神交は故旧に同じく
宦跡共山川　宦跡は山川を共にす
気類人文盛　気類　人文盛んに
滄波地脈連　滄波　地脈連なる
平生不読律　平生　律を読まず
終覚愧時賢　終に覚ゆ　時賢に愧ずるを

尾聯は、日頃の法律の不勉強を恥じたものである。その不足を補うために、十月二十八日には『大清律例[注8]』を神戸で購入した（『日記』三七九頁）。

五月二十三日、馬屋原の送別の宴を諏訪山にある常盤楼に設け、馬屋原のほか、新任所長千葉貞幹、検事正草野宜隆、代理兵庫県知事秋山恕卿（一八五〇～?年）、同参事窪田静太郎、税務長南挺三、警部長野間口兼一、税関長穎川君平（一八四三～?年）、かつて駐広東領事を務めたことのある電信局長坪野平太郎、裁判所の通訳鉅鹿赫太郎らも招待して、大いに盛り上がった。草野、野間口の両者は、酒の勢いで口論となり、さらにこの日は英国王の誕生日とも重なって、同席した英国領事も酩酊して、路傍に酔いつぶれ、巡査により領事館まで「送還」された（『日記』四一二頁）。日・中・英の官僚がともに酒に飲まれてしまった、国際都市神戸ならではの憎めない「酒態」の一幕ではある。

六月三日、鄭孝胥は手合亭で懇意な仲になっていた芸子小歌津に一絶句を贈った（『日記』四一六頁、『詩集』四四九頁「小歌津請為印其所照小影因題一絶遺之」）。「傾国の美女」を前にして言葉の通じぬもどかしさを詠んでいる。

対面含情写意難　対面すれば情を含むも　意を写すこと難く
微波欲托総無端　微波　托せんと欲するも　総べて端無し
従渠解語能傾国　渠[かれ]〔小歌津を指す〕　語を解せば　能く国を傾くるに従[まか]さんも
祇作春風画裏看　祇　春風画の裏[うら]と作して看んのみ

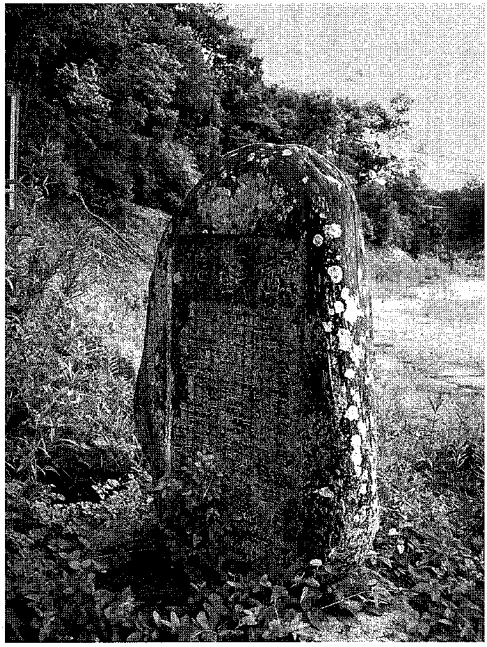
## 3、「通藝碑」

九月二十四日、橋本海関（一八五二～一九三五年）が「池上」という日本人を連れて、鄭孝胥を訪ねた。翌二十五日、海関らの依頼に応じて、画師「杉隠士」の碑に「通藝碑」と題字した（『日記』三七一頁）。九月二十七日、海関がその題字を持って帰った（『日記』

三七二頁)。

ここでいう「杉隠士」とは、池田春暈(一八三一～一八九一年)のことである。春暈は生前、三木大宮八幡宮の神官を務め、画家、漢詩人としても名声を博した。「杉」は「三木」をもじったものである。没後二年、弟子たちの計らいで記念の碑が建てられた。[注9] 碑額は鄭孝胥の篆書体「通藝碑」、碑文は海関の撰、書は藤本節二[注10]の筆に成る。碑は現在、大宮八幡宮境内のそば、箕谷(みのたに)を一望できる高台の一角にたたずんでいる(写真参照)。

碑文の原文は以下の通りである(句点は筆者が施した)。書き下し文は松村仏都平氏の論考にあるので、ここでは省略する。



「通藝碑」兵庫県三木市本町2丁目大宮八幡宮境内、2010年6月撮影。

通藝碑　篆額　清国神戸領事鄭孝胥撰幷書

明治廿四年九月廿一日、三木隠士春暈翁卒。門人買石誌其碑、橋本徳為之辞。曰、翁幼嗜画、運筆構思、天機迅露、迥出時流。父文暈君原善画、見大驚異曰、斯子学当造古人。即先命学古法書、親指古人授名蹟稿本、遂大進。所写青緑山水、人咸宝之。晩年画華卉人物士女、密緻而不傷於刻劃、冶而清、艶而逸、古意猶存。翁年六十一、初称原氏、居三木。因自号杉隠士、妻曰池田氏、先翁十四年卒。子曰胤、次曰其二、冒他姓、胤祠其後。系曰、翁之祖居京師、父以画名京師、翁因生於京師、為池田氏婿、遂以池田氏而顕。京師老輩論翁画曰、其用筆渲染、不出華飾。余嘗見青年老子図、不必飾法、純以天行、別生逸趣、蓋食古而化也。銘曰、六法周行、構思最長、妙能設彩、丰骨俱在。邑曰大美亜、原曰三谷。高三尺者、翁之碑耶。

癸巳秋九月　海関橋本撰　藤本節二書

なお、この記念碑の竣工式は十一月五日、盛大に催されたようである。当時の新聞でその事が左記の通り予告されている。[注11] 翌十一月六日の同紙は欠号のため、実際の様子は不明だが、さぞ盛会だったであろう。

先頃の本紙上に昨年物故したる画伯原春暉翁のために美嚢郡三木町その他各地の有志者等が紀念碑建設の計画をなし十月五日その竣工式と追福書画会とを兼ねて執行するよしを記し儘が十月五日は十一月五日の誤にて当日は日下南宗派の泰斗と称せらる、京都の田能村直入翁(過日来加東郡社村にあり明後日三

木町に赴く筈）明石の細谷斎翁を始め文人の出席頗る多きよしなれば定めて盛会なるべしと云ふ。

## 二、神戸の原風景

### 1、楼中にて風雨を観る

鄭孝胥は、神戸赴任後九ヵ月半が過ぎた一八九四年一月二十一日の日記に、神戸で作った詩文集『神戸集』に序文を書いた旨記している（『日記』三九一頁）。その詩文集の実物は未見であるが、神戸在任中の日記に記載され『海蔵楼詩集』に収められた作品群が、少なくともその一部であることは間違いないだろう。それらの作品のいくつかをここで紹介し、もって百十数年前の神戸の原風景や、それに託して表明された彼の心境と情念を探ってみようと思う。

一八九三年八月十八日（旧暦七夕）、鄭孝胥は神戸の台風について、以下のような一首を詠み、漂泊の心境を表した（『日記』三六六頁、『詩集』二十八頁「七月七日官舎風雨中作」）。

楼中観風雨　　楼中にて風雨を観る

四囲山海一身蔵　　四も山海に囲まれて　一身蔵す
歴落欽崎自笑狂　　歴落欽崎として自ら狂を笑う
天際雲濤秋益壮　　天際の雲濤　秋益ます壮んに
楼頭風雨昼初涼　　楼頭の風雨　昼初めて涼し
操心稍悟安心訣　　心を操して（あやま）　稍悟る　心を安んずるの訣
更事翻思忍事方　　事を更へ　翻って思う　事を忍ぶの方
独有韋郎言可念　　独り韋郎の　言　念う可き有るのみ
俸銭虚愧対流亡　　俸銭　虚しく愧ず　流亡に対するに
（華人来者、半皆流亡之戸也。）

第二句は『世説新語』容止篇所載の、周顗が桓彝を評した「欽崎歴落、可笑人也」という言葉を下敷きにした表現。尾聯は南朝梁の韋闡が建寧県を治めることになるや、俸禄百餘万をことごとく伯父に委ねて処分せしめ、郷里の人々に徳とされたという故事（『南史』本伝）を踏まえ、そうでなくとも流亡の身の上の者の多い神戸在住の華人たちが台風の襲来により、ますます生活に困窮することになるだろうと案じ、虚しく厚い俸禄を受けている我が身を恥じているのである。

### 2、懐人亭

十月二十日、重陽の季節にあたって、「登高」と題する長句を作り、神戸の秋色を目の当たりにして、故郷の人々を思い出した（『日記』三七六頁、『詩集』二十九頁「九日大阪登高」[注12]）

霜風連朝作重陽、蕭寥坐落無人郷。端居秋気最先感、起与虫鳥争号翔。
楼頭山海自囲繞、於意不楽如韏繮。逝将去此更一縦、瞬息百里遙相望。
未花蛮菊那足道、眼底正喜落日黄。登高聊欲去濁世、負手天際終旁皇。
空中鳥跡我今是、底用著句留蒼蒼。故山帰隠有兄弟、到海浣此功名腸。

十月二十二日、鄭孝胥は領事館内にある茅葺きの東屋を歩みつつ、沈曾植（字は子培、一八五〇～一九二二年）らから寄せられた詩を吟じ、しばらく徘徊した後、東屋を「懐人亭」と命名し、詩を残した（『日記』三七七頁、『詩集』三十頁「懐人亭」）。

孤亭雲海渺相思　孤亭　雲海　相思渺たり
独上惟吟憶我詩　独り上りて　惟吟ず　我を憶うの詩
従此故人感天末　此れより故人　天末に感ず
不妨来此立移時　妨げず　此に来りて　立ちて時を移すを

其二

海色微茫自入檐　海色　微茫として　自ら檐に入る
亭中最好眺風煙　亭中は最も好し　風煙を眺むるに
如今題作懐人地　如今　題して　人を懐うの地と作す
白鳥蒼波共惘然　白鳥　蒼波　共に惘然たり

この年の暮れ、鄭孝胥は自らの室号を「無悶」とした。かすかに海が見える居室に、日頃の雑務（主に華僑同士の係争の処理）から逃れたい心境を託した命名である。その室を詠んだのが以下の一首である（『日記』三九三頁、『詩集』三十四頁「決壁施窓豁然見海題之曰無悶」。日記と詩集で字句の異同あり）。

海天在我東、胡為伏暗室。容忍久不決、奇境真坐失。
庸流那辦此、此秘待余発。君看五尺地、概若収溟渤。
閑来一拠案、意気与天逸。滔天極横流、而我方抱膝。
窓間独偃蹇、万象繞詩筆。竪儒奮清狂、作事衆猶慄。
前身疑幼安、遯世送日月。

## 3、有馬温泉

一八九四年六月二十四日、鄭孝胥は有馬温泉の二階坊[註13]に宿泊した。三日後の二十七日に、長詩「有馬雑詩」を作成、その麗姿を克明に描いている（『日記』四二二～四二三頁、『詩集』四十～四十一頁[註14]）。日清戦争開戦の風雲急を告げ、領事館が閉鎖されるのを目前にして、束の間の休息を取った詩人の目に映った有馬の景色は依然美しい。

蝶飛山無人、澗響若読曲。岩雲媚晴暉、起弄海波緑。
諸峰殊陰晴、嵐雨灑我轎。乱泉路欲迷、山鳥時飛導。
入山凡幾曲、緣澗凡幾彎。山回澗転処、海風赴襟寒。
回看来処峰、伏地微露尖。峡口雲行急、撲面如軽煙。
側臥看群巒、起伏極有勢。長天如匹絹、潑緑恣遊戯。
雲白山青青、望可数百里。我従山背来、対境心数起。
山西曰夕陽、山東曰朝陽。夕陽只芳草、朝陽松柏長。

山街足楼閣、姝麗多倚市。借吾一榻風、夢入渓声裏。
松蘿風飄然、双泉自奔瀉。踞石而科頭、白衣山人也。
陰陽為之炭、不虧亦不盈。已余幽憂疾、始信泉有霊。
渓館無人至、松杉闊翠微。鳥山底処似、沈范二公祠。
渓声使人静、鳥語引熟寐。風従前山下、尽帯松竹気。
筆工亡古法、但于俗書宜。竜蛇入吾手、毛錐空爾為。

雷奮雨百倍、雲馳峰四移。山霊好才気、献此一段奇。
搖兀竹藍間、怕雲下密幄。銀竹万叢鳴、先生夢徐覚。

## 三、折田五峰らとの交流

### 1、五峰を訪ねる

神戸着任後間もない一八九三年四月二十七日、鄭孝胥は兵庫県の日華通訳谷信敬の紹介で、当地の漢詩文の「善者」として橋本海関、折田五峰の名を聞いていた（『日記』三五〇頁）。その数日後の五月一日、鄭孝胥は橋本海関の来訪を受け、その交友の事始めを「筆談頗通」と記した（『日記』三五〇頁）。以来、海関は終身の交情を結ぶ友人となった。これについては、次節で詳しく追跡することにして、ここではまず折田五峰との交流について見てみよう。

さて、六月四日、鄭孝胥は橋本海関と折田五峰の訪問を受けた。たまたま五峰のもとを訪れた藤沢南岳も、領事館への紹介を五峰に頼み、鄭孝胥との面会を実現した。南岳は著書『修身新語』[注15]一冊と写真一枚を鄭孝胥に贈った（『日記』三五六頁、『折田年秀日記（第三）』[注16]四〇八頁）。六月十一日、鄭孝胥は大阪に赴き、南岳を訪ねたが、不在のため、帰還（『日記』三五七頁）。なお、南岳との交流は彼の在任中続いたようである。翌九四年六月三日、南岳が来訪したが、鄭孝胥が外出中だったため、会えなかった。南岳からは編著『七香斎類函』[注17]第五十七巻（術藝類文学之部）の贈呈を受けた（『日記』四一六頁）。

折田五峰（一八二五～一八九七年）、名は要蔵、字は年秀、五峰は号。鹿児島の士族出身。藩校造士館で学ぶ。一八四六（弘化三）年、江戸に出て、昌平黌に入学。徳川幕府の終焉期には国事に奔走し、海防策を講ずるため樺太に渡航し、黒竜江まで到達した。一八六四（元治元）年、島津久光が楠社造営を企画するに際し参画した縁故により、一八七三（明治六）年「湊川神社」の初代宮司に招ぜられ、以後維新後の神祇行政へと身を投じた人物である。[注18]

五峰には『五峰小稿』とその続編『五峰小稿補遺』（上・下、一八九六年十二月、亀山節宇、原口南村評点、橋本海関跋）のほか、漢詩集『氷魂鉄骨集』（一八九四年十二月、橋本海関編、小原竹香、橋本海関、岩崎水哉、桜井錦洞評、水越耕南、井上不鳴跋）、歌集『湊川懐古』（一八八五年七月、折田五峰編集、湊川神社蔵版、水越耕南、和田大猪、大藪文雄校閲）などの著作がある。

六月六日、鄭孝胥は海関を訪ねるため湊川神社に赴いた。海関は不在だったが、五峰の歓待を受けた。そして、五峰の所蔵している黄石斎の作品を鑑賞し、「黄石斎画松最佳」との評語を残した（『日記』三五六頁）。

黄石斎（一五八五～一六四六年）、名は道周、字は幼平、石斎は号。鄭孝胥と同じく福建省漳浦の人。進士出身。明朝が滅びた後、南明の礼部尚書として清軍と戦い、捕らわれ殺された。学者であり、書画もよくした。黄石斎の作品がなぜ五峰のところにあったのか。日本に赴いた明の遺民朱舜水（一六〇〇～一六八二年）がもたらしたと推測することも可能である。もとより朱舜水には『大楠公御碑賛』があり、その賛文を刻む石碑は今も湊川神社の境内にある。

なお、この訪問の際の筆談の草稿は五峰によって保存され、六月八日に、南岳に送られたが（『折田年秀日記（第三）』四〇九頁）、その所在は不明である。

## 2、「五峰小稿序」

さて、七月二十四日、鄭孝胥は折田五峰の詩集の序文を作成した（『日記』四二八頁）。全文は以下の通りである。[注19]

五峰小稿序

為学之道二、曰為己為人而已。至於詩亦然、其為己者、抒胸臆寄興託期於自娯、若其詞之工拙所弗計也。其為人者、矜格調務藻飾、期為得名、若其情之当否亦所弗計也。日本折田五峰初嘗以武功顕、足跡北至満洲、既而折節為詩、奉祠於神戸之楠公社。其詩激昂慷慨、有幽并烈士之気、不事声調藻飾、専以発其胸臆寄託、此真吾所謂為己之学者矣。夫為己者専於内而或兼得於外、為人者務於外而或転喪其内。此理甚明、彼世之背馳者殆由稟於天性而不能自克、是固無可如何者也。非独詩而已、天下国家之大計、専内而得於外与務外而喪其内、孰為工拙、孰為当否。疇能即吾説而思之者、聊於五峰之詩発之、以待世人之自悟焉。

光緒二十年夏六月　無悶道人　福清鄭孝胥書（印：孝胥）

『論語』憲問篇の孔子言「古之学者為己、今之学者為人」に基づいて、五峰の詩の作風を「己の為にする者」と位置づけ、「己の為に」詠む詩は一見「其の詞の工拙」を計らぬものであるが、「天下国家の大計」も含めて、「人の為にする」やり方よりも、「己の為にする」やり方の方が、「内を専らにして外に得る」に至る点で、真の意味での「工」でもあるし、「当」でもあるのだというように、自説を展開した後、この説に即して考えてみようと思われる向きは、五峰の詩の中に「己の為にする」精神の跡を見出して欲しいと結んでいる。[注20]

この詩集は、藤沢南岳の序文のほか、亀山雲平（節宇）、原口潜夫（南村）、橋本海関など神戸で活躍した漢詩人たちの跋も付されている。翌一八九五年十二月に刊行されたときには、鄭孝胥は既に神戸を離れていた。

日清戦争の開戦により、神戸理事府は一時閉鎖されることになった。一八九四年八月十二日、鄭孝胥一行はフランスの船に乗り込み、翌十三日、神戸をあとにした。

# 四、橋本海関との交流

## 1、海関とその詩文

橋本海関、名は徳、字は有則、通称小六、海関は号、明石の人。幼いころ梁田蛻巌（一六七二～一七五七年）が創設した塾「景徳館」で梁田葦洲（一八一六～一八七六年）に学ぶ。一八六九（明治二）年、明石藩校「敬義館」の教師となり、一八七七年、神戸師範学校（現神戸大学発達科学部の前身）の教諭になり、習字などを教えた。翌年、神戸中学校の教諭にもなった。一八九〇年から九一年にかけて、『神戸又新日報』の漢詩欄を主宰し、詩文の評点を担当した。詠物詩が得意で、書家としても名を馳せた。一八九九年以降は隠遁生活をしながら、明石の史跡調査に精力を傾けた。その『明石名勝古事談』は地域の歴史を語る上で必須の資料である。

海関の漢詩文関係の著作や作品集としては『明治作詩含英』（一八八三年）、『明治詩学精選』（一八八三年）、『精纂詩学新選』（一八

八三年、編著)、『海関詠物詩集』(一九〇三年)、『百物叢談』(一九〇三年)、『赤石三勝詩集』(一九〇七年)、『朝鮮三古都詩』(一九二三年)、『古琉球吟』(一九二八年)、『馬牛裾』(一九三三年)、『馬牛裾餘輯』(一九三五年)などがあり、史跡に関する著作には『明石名勝古事談』(一九二〇~一九三三年、一九七四年合本刊行)がある。その漢詩文の実力について、「兵庫県下恐らく君の右に出ずるなからん」[注21]との評価を得ている。

前節で見てきたように、海関は折田五峰、藤沢南岳などを鄭孝胥に紹介するのみならず、自らも積極的に鄭孝胥と交流を重ねた。十月二十九日、橋本海関は自作の『紀平将門叛事』(『平将門事略』とも)を持参して鄭孝胥を訪ね、修訂を求めた。十一月十二日にも海関が来訪(『日記』三八一頁)。『紀平将門叛事』の修訂が完成したのであろう。十一月十四日、海関は「松覃」(松茸か)を土産として鄭孝胥に贈った(『日記』三八二頁)。

その後、海関との面会はしばらく途絶えたが、翌九四年七月八日、海関の来訪を受け、安養山(現在の神戸市中央区楠町にある大倉山の近傍、安養寺の辺り)で休養したことを聞き、感心した。また、折田五峰の詩集の序文の作成を依頼された(『日記』四二四頁)。翌九日、海関のため、陶淵明の詩句を合した「卓為霜下傑、政頼古人書」(「和郭主簿二首」其二と「贈羊長史」から)との篆書の対聯を作成し(『日記』四二四頁)、十一日に海関に贈った(『日記』四二五頁)。

鄭孝胥帰国の三年後、一八九八年六月から、海関は短期間ではあるが、康有為(一八五八~一九二七年)の弟子である韓文挙(字は孔庵、号は樹園、広東省番禺の人、一八六四~一九四四年)らが神戸で刊行した『東亜報』の翻訳、編集に携わった。神戸における中国の維新運動支援の一翼を担うものであった。鄭孝胥は帰国後、総理衙門章京、京漢鉄路南段総辦兼漢口鉄路学堂監督、広西辺防大臣、上海中国公学校長、東三省錦瑷鉄路督辦、湖南布政使等の要職を歴任したが、一九一一年十月に武昌蜂起が勃発するや、帰任しようとして上海で立ち往生し、以後そのまま一九二三年半ばまで上海にとどまった。

## 2、『一葦航吟』

一九一九(大正八)年四月一日、橋本海関は子の関雪(一八八三~一九四五年)、孫の節哉(一九〇四~一九六五年)を連れて、中国への旅に出た。上海に着いた海関が、四月八日、海蔵楼を訪ねたが、鄭孝胥は不在だった(『日記』一八二二頁)。海関は贈詩一首を残した。[注22]

贈鄭孝胥

久絶音書夢忽回　鄭孝胥に贈る　久しく音書絶えたるも　夢忽ち回めたり
単裘廿載禦寒来　単裘廿載　寒を禦め来る
半生堅節霜中竹　半生の堅節　霜中の竹
一世清標月下梅　一世の清標　月下の梅
身遇盤根知利器　身　盤根に遇いて　利器を知り
心排紛糾見奇才　心　紛糾を排して　奇才を見る
千鐘六印非今日　千鐘六印は今日に非ず
不若延賢四置臺　若かず　賢を延きて四たび臺を置てんには

詩は鄭孝胥の清朝への忠節とその俊逸なる人柄を、また、これまで彼が数々の難局に対処して見せてきた非凡な才能を称えた上で、最後に「これまでの豊かな蓄えに頼って、引きこもって過ごすのは、まだ早い。もう一度英才を集めて、教育事業に携わってはいかがか」と勧めているのである。

さて、海関祖父子三代の旅は数ヶ月続いた。神戸から門司を経由して上海に上陸、杭州、蘇州、無錫、鎮江、南京、安慶、黄州、蕪湖、九江、廬山、岳州など長江沿岸の都市名勝を訪ね、重慶まで足を伸ばした。その後、鎮江から北上し、兗州、済南、泰山、曲阜、滄州、天津、北京へと、さらに山海関を出て、大連、奉天をへて、安東から朝鮮に向かい、新義州、平壌、京城などの地を訪ね、釜山港から下関に渡り、列車にて故郷の明石に帰還した。

海関の紀行詩は一九二二（大正十一）年八月に、広島市堀川町の上野霊雄の刊行によって、和装本『一葦航吟』と題して世に出た。

巻頭には関雪の「江南春望」の口絵が飾られているほか、鄭孝胥、李軫鎬（朝鮮人、一八六七～一九四三年）[注23]の直筆序文が寄せられた。評点を施したのは中国人楊幼樵（文恭、浙江省紹興の人）と朝鮮人崔永年（梅下、京城の人、一八五六～一九三五年）である。巻末には山本憲（号は梅崖、高知の人、一八五二～一九二八年）、股野琢（字は藍田、兵庫の人、一八三九～一九二一年）の感想文と松平康国（号は天行、長崎の人、一八六三～一九四五年）の賛辞、崔永年の跋、廉泉（号は南湖、江蘇省無錫の人、?～一九三二年）の作、妻の呉芝瑛（字は紫瑛、号は小万柳堂、安徽省桐城の人、?～一九三四年）の筆になる絶句と関雪直筆の絶句二首など、日、中、韓の師友から数多くのメッセージが寄せられている。鄭孝胥の序文は以下の通りである。

光緒甲午、余始識日本橋本海関先生於神戸。嗜古好文、心甚異之。越二十餘年、歳在辛酉、復得先生恵書。知於庚申夏日西遊、所至皆以詩紀之、裒然成巻、索序於余。夫二十餘年之間、天旋地転、陵谷万変。而斯人嗜古好文之心皎然不変、可謂深造自得者矣。詩以音節為主、日本学者所為詩、其詠古述懐之情、方之古人、初無愧色、而多疎於音節。如君集中「楓橋」「柴桑」諸詩、意趣高妙、而音節深婉。乃知嗜之深者、自有天然之合。而詩之音節純由天籟亦可悟已。

辛酉八月二十九日　閩県鄭孝胥書（印：孝胥、鄭蘇堪）

日本人の漢詩には「音節」、つまり平仄の欠点があることを指摘する反面、海関の詩のいくつかは意趣が「高妙」なだけでなく、音節も「深婉」で、詩を嗜むことの深さから来る「天然之合」があると賞賛している。

### 3、兵庫を再訪して

一九二八年九月、鄭孝胥は退位した宣統帝愛新覚羅・溥儀（一九〇六～一九六七年）の意向を受けて、早稲田大学卒業の長男鄭垂（一八八七～一九三三年）を伴い、私的身分で日本を訪問した。水野梅暁（広島県福山の人、一八七七～一九四九年）らの斡旋によって、日本の政界、軍部、文化界の人士と会談し、溥儀の「復辟」に対する日本側の意向を探るための旅であった。[注24]鄭孝胥一行は九月二十二日神戸に上陸した後、九月二十四日、京都で橋本海関の来訪を受け

た（『日記』二一九八頁）。十月七日まで関西（京都、神戸等）に滞在し、次いで十月八日から二十二日まで関東（東京、日光）に滞在し、十月十五日に神戸から乗船、長崎を経て帰国した。その間、鄭は自らも詩を詠んだだけでなく、日本の政財界の名士や大学教授、詩人たちとの唱和もした。それらの作品を収録したものとして太田外世雄『鄭孝胥蘇龕先生東遊詩篇及書翰』（一九二八年）及び『鄭孝胥蘇龕先生略歴・附東遊詩篇及書翰』（一九二八年）があり、また、『海蔵楼詩集』三六三～三六七頁及び四八五～四八八頁にも収録されている。

一九三三年五月十四日、「満洲国」の国務総理になった鄭孝胥は橋本関雪の訪問を受け（『日記』二四六〇頁）、六月二日、海関の詩集『馬牛裾』のために、序文を書いた（『日記』一四六四頁）。その序文は同年九月上梓の『馬牛裾』の巻頭を飾っている。[注25]

海関先生、四十年前老友。方予任神戸領事日、曳杖過従、縦談抗論。其好古嫉俗之概、今猶在目、而先生年八十二矣。近著『馬牛裾』二巻、取退之之語、以諷子弟。其傲岸不可一世、不減壮盛之日。必使世士聞而縮頸、亦足豪矣。使予幸得謝去重遊兵庫、出書共読、其快何如、書此以為異日握手之券。

癸酉夏五　孝胥（印：夜起庵）

## むすびにかえて

### 1、耕南最後の詩

一九三二年三月に「満洲国」の国務総理に就任した鄭孝胥は、それこそ「日理万機」の毎日で、その生活は多忙を極めるようになった。しかし、その文人としての営みはいささかも低調になることがなかった。就任間もない時期に、旧友水越耕南の賀詩に対する和詩において、忠節を尽くす「白首」の我が身のやむを得ない心境を吐露している（『詩集』四〇〇～四〇一頁）。この詩は我々が見ることのできる耕南の、恐らく最後の詩であろう。

原作　水越成章

欽君忠節最超群　欽う　君が忠節　最も群を超え
赫赫声名世所聞　赫赫たる声名　世に聞こゆる所なるを
応是遊蹤猶在夢　応に是れ　遊蹤猶お夢に在るべし
湊山松籟甲山雲　湊山（神戸市の旧湊川の上流一帯）の松籟
　甲山（六甲山）の雲

和水越成章韻　鄭孝胥

驚回旧夢悵離群　旧夢より驚き回むれば　悵として群を離れ
久別応知過所聞　久別　応に知るべし　聞ける所に過ぎたるを
忠孝労生終有愧　忠孝　生を労して　終に愧ずる有り
何如白首臥松雲　何如ぞ　白首　松雲に臥するに

この賀詩はその後、意外なところで唱和されることになった。すなわち伊藤憐之助が発行人を務めていた『台湾時報』一六四号（一九三三年七月刊行）の「蓬瀛詞壇」欄（同誌、一四七頁）に上引の耕南・鄭孝胥の唱和詩を掲載する（両詩とも字句の異同が若干あるとともに、台湾の詩人荘桜癡、張篁川（名は達修、一九〇六～一九八三年）らの唱和詩も発表されたのである。

賦呈水越耕南翁用寄蘇龕詞長原韻　　荘桜癡

灑脱襟懐思不群　灑脱なる襟懐　思い群せず
騒壇政界両会聞　騒壇　政界　両会に聞こゆ
漫言隠者無功業　漫ろに言う　隠者には功業無しと
早晩神山管白雲　早晩　神山〔神戸〕に白雲を管す

同　　張篁川

清淡早共竹林群　清淡　早に共にしたり　竹林の群れ
万径松声静夜聞　万径の松声　静夜に聞こゆ
尚有白頭知己在　尚お白頭の知己在る有り
大倉山畔賦停雲　大倉山畔　停雲を賦す

しかし、耕南はこれらの唱和の作を読むこともなく、一九三三年二月二十六日、神戸の自宅で八十四歳の生涯を閉じた。翌一九三四年三月、鄭孝胥が「満洲国」の国務総理として、日本を公式訪問した。かつて理事として神戸に在任した一八九四年からは四十年後のことであった。

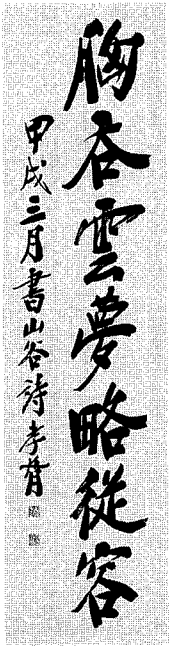
## 2、懐人亭下　更に何をか言わん

三月二十五日、神戸に上陸後、鄭孝胥一行はすぐに東京へ移動した。東京での訪問日程をこなした後、四月十日、京都で橋本海関・関雪父子と昼食を共にした。場所は関雪の別荘「白沙村荘」であった（『日記』二五一八頁）。現在、白沙村荘は「橋本関雪記念館」として公開されており、鄭孝胥の書「瑞米山」が額縁に入れられて母屋に飾られている。日付はないが、このときの揮毫であろう。

四月十三日、大阪から甲子園ホテル（現武庫川女子大学第三学舎）に一泊して、翌十四日、小倉正恒（石川県金沢の人、号は簡斎、一八七五～一九六一年）住友総理事の要請に応じ、懐徳堂で王道について講演した。その夜、舞子（現神戸市垂水区舞子）にある住友の別荘に一泊した。翌十五日の朝、地元の団体や友人の求めに応じて、いくつかの揮毫をした（『日記』二五一九頁）。そのうちの一つ「胸呑雲夢略従容　甲戌三月書山谷詩　孝胥（印）」は現在、神戸華僑の団体である財団法人福建会館（法人設立は一九三〇年）に蔵せられている。[注26] 落款の甲戌三月は、新暦の一九三四年四月に当たる（写真参照）。北宋の黄庭堅（号は山谷、一〇四五～一一〇五年）のこの一句は「鄂州南楼書事四首」其三に見える。

勢圧湖南可長雄　勢いは湖南を圧して　長雄なる可し
胸呑雲夢略従容　胸は雲夢を呑んで　略従容たり
北船未嘗覩巨麗　北船　未だ嘗て巨麗を覩ず
複閣重楼天際逢　複閣　重楼　天際に逢う

雲夢は湖北省にあった古代の沢で、長江にまたがる広大な地域を指す。舞子の景勝地で目にした明石海峡が詩人にいにしえの大沢を連想させたのであろう。




鄭孝胥の書、財団法人福建会館所蔵。

その間、鄭孝胥は四十年前の神戸を思い出して、再度懐人亭を詠んだ（『詩集』四一八頁）。この一首は、鄭孝胥が自ら揮毫して水野梅暁に贈った『使日雑詩』と題する詩軸の中にも含まれている。(注27)

刻意傷春失夢痕　意を刻して春を傷むも　夢痕失せり
懐人亭下更何言　懐人亭下　更に何をか言わん
花前白髪風懐尽　花前の白髪　風懐尽きたり
不是銷魂是断魂　是れ銷魂にあらず　是れ断魂

口語的な表現のため、こなれない訓読となったが、結句がこの詩の眼目である。四十年ぶりに懐人亭にたたずんだ鄭孝胥の心を占めたのは、単なる哀愁のみではなかった。今すぐにでもタイムスリップできそうで実はできない我が壮年の日々の一こま一こまが、ありありと胸中に広がっていき、彼は深い感慨にふけったのであった。数年前の訪日に同行した長男鄭垂がその一年前に謎の死を遂げたことの無念さも、このとき彼の心に込み上げていたに違いない。(注28)

翌三五年十一月十二日、海関が八十四歳で世を去った。鄭孝胥は弔文を関雪に寄せて、海関の辞世を悼んだ。(注29)

橋本関雪仁兄左右。奉到敬函、驚悉
尊翁大人於十二日棄養。去年把晤、遂成永訣、可〔何〕勝哀痛。
四十餘年以来、離合縦跡、悠々終古。耿介高風、猶在眉宇。幽明雖離、情誼何殊。請将此書、供於霊几、以為告別。孝胥再拝
十一月十九日。

明治の開国以来、中国人との交流を触媒として一挙に活況を呈した日本の漢詩漢文の文化は、日中甲午戦争を境にしだいに下火になっていた。神戸における水越耕南と橋本海関、二人の大立者の相次ぐ辞世が最盛期の終焉を何よりもよく物語っている。しかし、漢詩文の素養が次世代においては、美術と融合した、より幅の広い藝術活動として花開いたのである。それは、水越耕南の子息で洋画家の松南（一八八八～一九八五年）であり、(注30) 橋本海関の子息で南画家の関雪であった。(注31)

（注）

1 鄭孝胥の日記は『鄭孝胥日記』（労祖徳整理、中華書局、一九九三年十月、第一～五冊）として刊行され、その詩集は『海蔵楼詩集』（黄珅・楊暁波校点、上海古籍出版社、二〇〇三年八月）として刊行されている。以下、本稿では日記を引用する場合はその総頁数を、詩集を引用する場合はその頁数と詩題を、それぞれ付記する。

2 深澤一幸「鄭孝胥氏の駐日公使館員時代」（大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究（三十二）』、二〇〇六年二月）、同「鄭孝胥氏と東京の漢学者たち」（同『言語文化研究（三十四）』、二〇〇八年三月）。

3 陳來幸「鄭孝胥日記に見る中華会館創建期の神戸華僑社会」（神戸商科大学学術研究会『人文論集』第三十二巻第二号、一九九六年十二月）。

4 柴田清継・蔣海波「漢詩人水越耕南（一八四九～一九三三）研究序説――その生涯と著作」（『武庫川国文』、第七十二号、

二〇〇九年三月）、同「水越耕南の初期の作品とその漢詩文ネットワーク――『開口新詞』と『薇山摘葩』をめぐって」（『武庫川国文』、第七十三号、二〇〇九年十月）、同「水越耕南と清国文人との文藝交流――清国駐神戸理事府初代・第二代の外交官を中心に」（『日本語日本文学論叢』第五号、二〇一〇年三月）、同「水越耕南と『萍水相逢』――併せて萍水吟社について」（『武庫川女子大学紀要』（人文・社会科学）第五十七巻、二〇一〇年三月）、蔣海波「明治前期東亜文化交流の一側面――漢詩人水越耕南の交友を中心に」（『東アジア三国の文化――受容と融合』、関西文化研究叢書（十二）、二〇〇九年三月）。

5 長尾雨山と鄭孝胥の交流については、樽本照雄「鄭孝胥日記に見る長尾雨山と商務印書館（一～五）」（『清末小説から』第三十五～三十九号、一九九四年十月～一九九五年十月）を参照されたい。

6 前掲陳來幸論文、十九頁、表三。

7 近藤春雄『日本漢文学大事典』（明治書院、一九八五年三月）六一五頁。

8 乾隆五（一七四〇）年に制定された『大清律例』。以後、附律の条例に対して増減、修改が行われても、律文はほとんど変動せず、宣統二（一九一〇）年まで刑法としての効用が維持された。田濤、鄭秦校点『中華伝世法典・大清律例』（法律出版社、一九九九年九月、一～八頁）。

9 松村仏都平「幕末から明治に生きた三木の文人：池田春濤」（神戸史学会編『歴史と神戸』第十二巻第五号、一九七三年九月）。

10 藤本節二（字は古素、号は煙津、一八四九（一説では一九三八）～一九二六年）、兵庫県神崎の人、書、画、詩（詞）に長じた文人である。詩集には水原渭江編注『煙津詞』（大阪、進進堂書店、一九六七年三月）が、伝記には松岡秀隆『煙津藤本節二』（神戸、友月書房、二〇〇八年五月）がある。

11 「書画会と竣工式」（『神戸又新日報』明治二十六年十一月一日）。

12 詩集では「大阪」とあるが、実際は神戸での「登高」だったろう。日記と詩集で字句の異同あり。

13 二階坊は有馬温泉十二坊の一つ、現在は「御所坊」の一部である（http://www.goshobo.co.jp/）。

14 この長詩は『詩集』では「自住吉遊有馬入山雑詩」（起句から「朝陽松柏長」まで）と「有馬雑詩」（「山街足楼閣」から）とに分かれている。日記と詩集で字句の異同あり。

15 藤沢南岳『修身新語』（岡島真七、一八八三年一月）。自序のほか、片山冲堂、陳曼寿、土屋鳳洲の評が施されている。

16 湊川神社編『折田年秀日記（第三）』（湊川神社、二〇〇七年五月）。

17 藤沢南岳編『七香斎類函』（大阪、梅原亀七、一八八九～一八九〇年）。現存十冊（巻三十一：性行類叡聖忠之部、巻四十七：性行類隠逸部鑑識之部、巻五十六：術藝類文学之部、巻五十八：術藝類述著射剣等部、巻六十一：術藝類和歌文藻部、巻六十三：術藝類書画之部、巻六十五：術藝類暦算管絃棋之部、巻六十八：術藝類医仙之部、巻七十：術藝類僧尼之

部、巻七十三：術藝類耶蘓相卜筮占候部）。大阪府立図書館所蔵。

18 折田年秀『折田年秀略履歴』（一八九三年）及び『折田年秀日記（第一）』（湊川神社、一九九七年十一月）所収の湊川神社宮司栃尾泰治郎の「序」による。

19 折田年秀『五峰小稿』（折田年秀、一八九五年十二月）序文。

20 本稿では行論の都合上、五峰の作品を一首も紹介しないが、我々は今後、五峰の漢詩文についての別稿を執筆する予定である。

21 山内直一編『兵庫県人物列伝』（我観社、一九一四年八月）六十頁。

22 橋本海関『一葦航吟』（上野霊雄、一九二二年八月）三丁。

23 李軫鎬については稲葉継雄「李軫鎬研究―朝鮮総督府初の朝鮮人学務局長の軌跡―」（九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会編『国際教育文化研究』Vol. 6、二〇〇六年六月）を参照されたい。

24 陶徳民「鄭孝胥与水野梅暁的交往及其思想初探――以霞山文庫所蔵『使日雑詩』巻軸為線索」（『関西大学中国文学紀要』第二十六号、二〇〇六年三月）。

25 橋本海関『馬牛裾（上集）』（小松光雄、一九三三年九月）序文。

26 財団法人福建会館のご厚意により拝観させていただいた。同揮毫は鴻山俊雄『日中交流七十年――その道一筋の回顧』（神戸華僑問題研究所、一九八八年七月）一一七頁にも紹介されている。

27 前掲陶徳民論文。

28 鄭穎達口述、銭婉約記録・校注「回憶祖父鄭孝胥及児孫」（関西大学アジア文化交流研究センター編『アジア文化交流研究』第三号、二〇〇八年三月）。

29 橋本関雪著、橋本節哉編『白沙村人随筆』（中央公論社、一九七七年八月）二十頁。

30 水越松南については神戸市教育委員会ほか編『画仙水越松南の世界』（神戸新聞社、一九八二年十月）等。

31 橋本関雪については西原大輔『橋本関雪　師とするものは支那の自然』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年十月）等。

## 鄭孝胥與神戸、關西文人的文藝交流

（中文提要）

本稿以《鄭孝胥日記》爲主要線索，探討了鄭孝胥（一八六〇～一九三八年）擔任清朝駐神戸理事（領事）期間（一八九三～九四年）與神戸、關西地區日本文人交流的足跡。從一八八〇年代開始，在神戸已經有水越耕南（一八四九～一九三三年）、橋本海關（一八五二～一九三五年）等著名漢詩人活躍在當地文壇上。他們和以往一樣，積極地與鄭孝胥進行詩文唱和、點評著作、題寫序文、碑銘等文藝交流活動，結下了終身的友誼。鄭孝胥也把對神戸的美好印象，留在了他的詩作中。本稿對鄭孝胥與折田五峰（一八二五～一八九七年）、藤澤南岳等人的交流有所涉及，還對鄭孝胥題寫的池田春疊紀念碑進行了實地考察。